

カウンセラーの態度と技法を 確認型応答という概念から考察する試み

浅野 良雄

Consideration of Attitudes and Skills of a Counselor from the point of view of Confirmative Response

Yoshio ASANO

Abstract

The purpose of this study is to compare the concept of "Dialogue method" proposed by Asano with that of the traditional theory of counseling. The principle of "Dialogue method" is "Before telling your own thoughts and feelings, confirm in your own words the point the speaker wants to say." This method suggests classifying all responses in verbal communications into "confirmative response" and "reactive response." These new simple concepts and skills are effective in understanding the theory and skills of counseling. "Confirmative response" decreases weak points of "reflection of feelings" and "repeating mechanically." And the traditional classification of counselor's responses is simplified by the new classification.

Key Words : dialogue method, confirmative response, reactive response, counseling, empathy, active listening

1. 緒言

カウンセリングの基本である受容・共感・傾聴などの概念や技法を、カウンセラー以外の人たちにも理解し易いように簡略化し、「自分の考えや気持ちを言う前に、相手が言いたいことの要点を、相手に言葉で確かめる」ことを唯一の原則として強調するコミュニケーション技法（通称、〈対話法〉）がある¹⁾。のちに、この原則に含まれる2つの行為は、「確認型応答」「反応型応答」という造語で呼ばれるようになった。これらの応答は様々な表現で説明されているが、確認型応答とは、相手（話し手）が何を言いたいのかを聞き手が想像あるいは推測し、それが合っているかどうかを相手に言葉で確かめる行為であり、反応型応答とは、相手の発言に反応して自分（聞き手）の中にわき起こった考えや気持ち（質問も含む）を相手に伝える行為である、とまとめることができよう。なお、この概念を用いると、〈対話法〉の原則は、「反応型応答をする前に確認型応答をする」と、さらに簡略化される²⁾。

これらの原則や概念により、従来から使われてきたカウンセラーの態度と技法が、さらに簡略かつ具体化されたため、〈対話法〉はカウンセリング以外

の分野で実践され、その成果が報告されている。たとえば、高齢者介護施設の職員を対象とした研修³⁾、小学校の養護教諭による児童との会話や職員間の打ち合わせにおける実践⁴⁾、中学生を対象としたコミュニケーションスキルの指導⁵⁾がある。また、高校生を対象に〈対話法〉を応用した「確認スキル」を中心とする傾聴訓練を行ったところ、孤独感の低減や学校生活満足度の向上につながったという結果も報告されている⁶⁾。しかし、〈対話法〉に関する実証研究や実践はあるものの、〈対話法〉の原則や「確認型応答」「反応型応答」という概念や技法と、従来から広く認められてきたカウンセラーの態度と技法との関連は、まだ十分に検討されていない。そこで、本研究では、先行研究を参照しながら、〈対話法〉に関するいくつかの概念や技法と、カウンセラーの態度や技法との関連について考察する。なお、本研究では、カウンセリングやカウンセラーという呼称を基本とするが、多くの先行研究を引用する必要性から、心理療法やセラピストという呼称も、あえて厳密に区別しないで用いることとした。

2. 確認型応答の位置づけ

(1) 共感・繰り返しの関連

カウンセラーの態度や技法とされているものの一つに共感がある。共感は一般に、「他人の考え・行動に、全くそのとおりでと感ずること。同感。他人の体験する感情を自分のもののように感じること」7)、「相手の立場に立って物事を考え、感じるができること」8)とされている。専門的な定義としては、「カウンセラーがクライアント自身と彼の思考方法を理解すること」9)、「来談者そのものを、またその見方、感じ方を正確に聴くこと」10)がある。

ロジャーズは、効果的なカウンセリングが成立する条件の一つとして「感情移入的理解」を提示した。これが一般に「共感」と呼ばれているものである。ロジャーズの説明によれば、「感情移入的理解」とは、セラピストが「クライアントの私的な世界を、あたかも自分自身のものであるかのように感じとり、しかもこの“あたかも……のように” (as if) という性格を失わない」ことであり、「クライアントの怒りや恐怖や混乱を、あたかも自分自身のものであるかのように感じとり、しかも自分の怒りや恐怖や混乱がそのなかに巻きこまれないようにすること」11) (邦訳p.127) である。ところが、ロジャーズによるこの定義は、共感の「状態」について説明しているが、共感とは「どうする」ことなのかについては、「具体的な行為」という形で示していない。そのため、ロジャーズに従って共感を定義した場合、相手に対して自分が真に共感できているかどうかを自分自身で判断することは難しいであろう。また、ある人が相手に対して真に共感しているか、あるいは共感できているかどうかを第三者の立場から判断することも難しいであろう。先に述べたロジャーズ以外による共感の定義においても、その抽象性から、ほぼ同様の困難があると考えられる。

このような現状について、「ロジャーズの提示した諸条件は、精神分析における自由連想法のような固有の具体的な技法とその展開を持たないセラピストの基本的姿勢と考えられる」(p.103) ため「この当時(1940年代)のロジャーズの他の論文などから、『うなずき』や『感情の反射・明確化』という技術だけがいわゆるロジャーズ流のカウンセリングの練習として取り上げられて広まってしまった」(p.97) と考える研究者¹²⁾ もいる。そして、この「感情の反射・明確化」という技術が、さらに「繰り返し」や「オウム返し」となって、ロジャーズ流のカウンセ

リングにおける「初心者向けの技法」の一つとして一般化してしまっただけではないかと筆者は考えている。たとえば、ロジャーズによる傾聴技法として「内容の再陳述」と「感情の反射」をあげながら、「事柄の繰り返し」や「感情表現された言葉の繰り返し」(p.69) をその内容として提示している入門書¹³⁾ が、その一つの例である。また、ロジャーズ理論を軸としたカウンセリング技術を紹介する中で、「クライアントが語ったことがら、もしくは内容をできるだけ忠実にくりかえして言うことです」、「発言に心をこめて耳を傾け、できるだけクライアントの使った言葉をそのまま使って応答することが大切です」としながら、「『内容のくりかえし』は、ともすると形式的・機械的な『オーム返し』になりやすい」¹⁴⁾ (p.85) と付け加えている専門家もいる。なお、ロジャーズ理論とは異なるが、アイビイによるマイクロカウンセリングにおいては、「語られたことの重要部分をくり返し、短縮し、具体化する」(邦訳p.58) ことや、「1語または2語のくり返し」、「クライアントが話をした文章の最後の数語をそっくりくり返す」(邦訳p.49) ことが奨励されている¹⁰⁾。このように、共感に関するロジャーズの定義が抽象的だったことなどの理由により、ロジャーズの初期の論文¹⁵⁾ にある「感情の反射」(邦訳p.194) という表現が「繰り返し」という表現に形を変えて、これがカウンセラーによる「具体的」な応答技法の一つとして定着していったと考えることができよう。

しかし、ロジャーズ自身は、のちに、「私は、カウンセラーがクライアントのいったことを、そのまま反射し返すという、偽りの理解を不自然な技術で示すことを支持しているのではない。カウンセラーの教育や訓練の中にとときどき取り入れられている、私のアプローチの仕方を解説したものを見て、私は少なからず戦慄させられてきた」¹⁶⁾ (邦訳p.53) と書いている。また、「非指示的療法では、クライアントが述べた最後の言葉を繰り返せばよい」というふうな、自分たちが提唱しているアプローチが完全に歪曲されたことにショックを受けて、その後数年間は共感的傾聴に関して何も述べないようにした¹⁷⁾ (邦訳p.130) とも書いている。このように、「繰り返し」が、あたかもロジャーズが提唱している技法であるかのように誤解されたまま広がってしまったことについて、「ある種のセラピスト応答を表現するためにこの用語(筆者注; 気持ちのリフレクション)を使うことについては、部分的に私に責任があ

るのだが、年がたつにつれて私はその用語にとっても不満を覚えるようになってきた。その主な理由は「気持ちのリフレクション」(Reflection of Feelings)は頻繁にひとつの技術として、しかも判で押したような固い技術として教えられているからである¹⁸⁾(邦訳p.152)としながら、ロジャーズ自身も不満を呈しているのである。

一方、〈対話法〉が提唱する「確認型応答」の場合、型にはまった「機械的な繰り返し」の弊害を防ぐことができる。なぜなら、確認型応答では、「機械的な繰り返し」ではなく、聞き手が推測や想像をした「相手が言いたいこと」を、聞き手のコトバに「置き換え」て、その理解の仕方が「相手が言いたいこと」と合っているかどうかを確認することに重点が置かれているからである。つまり、「話し手が語ったコトバと同じコトバを繰り返す」ことは、基本的に確認型応答とは呼ばないのである。このように、確認型応答は、「相手が言いたいことの要点を、相手に言葉で確かめる」ことであるが、この方法を〈対話法〉とは別の観点から説明しているものとして、小川による、「共感的理解とは、まず、相手の立場になって、感情移入し、相手の内面にある感情的側面のみならず、知的側面をも含めたあらゆる側面を、ありのままに追体験し、つぎに、それらを、自己の視点から、もう一度、冷静にとらえなおし、さらに、その判断・認識が妥当であるか・否かを、相手に伝え、その当・否を、繰り返し検証することである¹⁹⁾(p.61)という記述が役立つであろう。この中の、「判断・認識が妥当であるか・否かを、相手に伝え、その当・否を、繰り返し検証すること」は、まさに確認型応答のことであると考えられる。そして、小川の記述を借りれば、確認型応答が意味する確認という行為が、聞き手による「共感的理解」や「感情移入」が反映された応答とほぼ同じ概念であることが理解できるであろう。

(2) 先行研究における確認との関連

共感あるいは共感的理解が、〈対話法〉のキーワードである「確認型応答」の中の確認という概念や技法とほぼ同じであることがわかったので、ここでは、「確認」という概念と技法が、従来の研究においてどのように用いられてきたのかについてさらに詳しく検討する。

ロジャーズは、晩年、「セラピスト応答は『気持ちのリフレクション』ではなく、『理解の確認』

(Testing Understandings)、または『知覚の確認』(Checking Perceptions)と呼ぶことを提案する¹⁸⁾(邦訳p.153)と書いている。さらに、ロジャーズと共にクライアント中心療法の効果を研究したゴードンは、「能動的な聞き方」として、自分が聞いたことの正確さを最終的に確認することの重要性について述べている²⁰⁾。また、企業の従業員などを対象としたリスナー研修のあり方を研究している三島らは、日常会話では確認は見過ごされがち、としながら、「積極的傾聴は、相手を相手の立場に立って理解しようとして聴くことですから、聴き手が理解したとと思っていることが、本当に相手が言いたいことであったかを確認することが必要になってきます。このときに聴き手が行うやり方に、確認、要約といった聴き方があります²¹⁾(p.182)と述べている。また、看護学生のコミュニケーション能力育成の研究をしている洵江らが開発したコミュニケーションスキル尺度である「VCSI」(Verbal Communication Skills Inventory)の「第Ⅳ因子」には、「相手の言動や気持ちの確認²²⁾がある。

ここで述べてきたように、「確認」の重要性は従来から指摘されていたのであるが、カウンセリング理論の研究では、受容・共感・傾聴という、より心理学的に重要な概念の陰に隠れてしまい、「確認」という一般的な概念は、その重要性があまり強調されてこなかったものと考えられる。

(3) 確認しようとする態度

共感という概念は、たとえば「カウンセラーがクライアント自身と彼の思考方法を理解すること⁹⁾と定義されているため、「共感できている状態・結果」が暗に求められている。したがって、共感の定義を文字通りに解釈すると、「共感した内容」が、「相手の真の考えや気持ち」と違っていることが許容されにくいと、比較的難しい技法であると言える。そこで、その難しさを回避するために考えられた技法が、「繰り返し」や「オウム返し」なのではないだろうか。そして、「繰り返し」は、文字通り、相手が言った言葉の一部を繰り返すので、「繰り返し」の内容が違っていることは原理的にありえない。しかし、繰り返しの「ポイントがずれているとイライラする」「細かく繰り返されると話の腰を折られる」などの悪影響が生じることも、効果的でない繰り返しの例として指摘されている²³⁾(p.45)。しかし、いくつかの問題を別にすれば、「繰り返し」

は比較的容易な技法であろう。ただし、「効果的でない繰り返し」から生じる弊害の問題については、実証的な研究報告は見当たらないものの、潜在的な問題として無視できないものと筆者は考えている。

一方、「確認型応答」の内容は、相手が真に言いたいことと仮に違っていても問題なく、確認しようとする気持ちと確認行為そのものに意義があるとされている²⁴⁾。なぜなら、相手と自分は別の人格であるため、相手に対して、いくら感情移入をして共感的理解を試みたとしても、その結果が違っている可能性があり、むしろ違って当然だからである。だからこそ、相手の発言に対する自分の理解の仕方が合っているかどうかを確認型応答という形で確かめるのである。そして、その行為は、相手に好感を与える可能性が高い。なお、話し手が伝えたい気持ちと、聞き手による確認の内容が必ずしも一致していなくてもラポールが維持されることを示した報告もある²⁵⁾。「相手を理解した」という結果よりも、確認によって「相手を理解しようとする姿勢」が重要なのである。そして、渡辺による、「理解的態度とは、相手が伝えようとする意味を、できるだけ正確に、できるだけ完全に捉えようと努力する姿勢のことである」²⁶⁾ (p.95) という記述は、この考え方を支持している。また、ロジャーズは、「クライアントの意味づけを『理解する』(understanding) ということは、本質的には理解『しようとする』(desiring to understand) 態度に他ならない。(中略) 関係のなかで伝わっているのは、理解しようとする態度であると結論してもよいであろう」²⁷⁾ (邦訳p.134) と述べている。つまり、「理解した結果」(確認の内容) はどうであれ、「理解しようとする態度」が重要なのである。そして、聞き手の中にその態度があることを具体的に目に見える形(耳に聞こえる声)で相手(話し手)に伝えるのが「確認型応答」という行為なのである。これらの先行研究を考慮すると、従来から重要とされてきたカウンセラーの態度と技法に「確認型応答」という概念と技法を加えることにより、「共感」の難しさと「繰り返し」の欠点を改善することができるものと考えられる。

3. 確認型応答と反応型応答の特徴

(1) 性質の違い

〈対話法〉では、確認型応答に加えて、反応型応答という概念が提示されている。反応型応答とは、聞き手が自分の考えや気持ち(質問を含む)を言う

ことである。確認型応答と反応型応答という概念を用いて、応答を大きく二つに区分することにより、聞き手による応答が話し手に与える影響の性質の違いを明瞭に示すことができる。

浅野によれば、確認型応答は、反応型応答と比べて、確認の言葉の内容に関わらず好感を持たれる可能性が高いとされている²⁾。つまり、確認型応答が、さまざまな条件に左右されずに好感を持たれやすいのに対して、反応型応答が好感を持たれるかどうかは、さまざまな条件に左右されるのである。

ここで、この二つの応答の性質を、先行研究と比較して考察する。淘江らは、ファシリテータ発言分類法(岩村・小柳,1984)を参考にして、明確化・受容・自己開示・感情の反射を「POSITIVE(望ましい)」応答に、否定・対決・解釈を「NEGATIVE(望ましくない)」応答に、提案・限定的質問・感想・説明の要求・情報・非言語的行動への言及・肯定・その他を「NEUTRAL(どちらともいえない)」応答に分類した²²⁾。これらの中で、「POSITIVE(望ましい)」応答に分類されるもののうち、明確化・受容・感情の反射は「確認型応答」である。自己開示は「反応型応答」であるが、好感を持たれる「反応型応答」として位置づけられよう。また、「NEGATIVE(望ましくない)」応答に分類される、否定・対決・解釈は、好感を持たれにくい「反応型応答」になるであろう。そして、「NEUTRAL(どちらともいえない)」応答に分類されるものは、さまざまな条件によって受け取られ方が異なる「反応型応答」に対応するであろう。これらのことから、淘江らによる、応答の種類と性質との関係は、浅野が提唱しているものとはほぼ一致していることがわかる。

(2) 説明の簡略化

ここでは、カウンセラーの態度と技法について従来から行われてきた分類と説明を、確認型応答と反応型応答という分類を用いて簡略化することを試みる。

スナイダーによる「カウンセラーのカテゴリーの定義」²⁸⁾ (邦訳pp.413-8)では、内容の再陳述・感情の明確化が「確認型応答」、場面構成・直接の質問・クライアントに責任をもたせる・非指示的なリード・解釈・賛同・再保証・情報が「反応型応答」に相当する。

ポーターによる「カウンセラーの態度(attitude)」²⁹⁾ (p.201)では、理解的態度が「確認型応答」、評価的態度・解釈的態度・診断的態度・支持的態度

が「反応型応答」に相当する。

ゴードン²⁰⁾の、相手からのメッセージの理解内容をフィードバックすることを意味する「能動的な聞き方」は「確認型応答」である。また、「お決まりの12の型」(邦訳pp.46-51)として、命令・指示、注意・脅迫、訓戒・説教、忠告・解決策などを提案、講義・論理の展開、批判・非難、称賛・同意、悪口をいう・ばかにする・辱しめる、分析・診断、激励・同情、質問・尋問、中止・注意をほかへそらす、をリストアップしているが、これらはすべて「反応型応答」に相当する。なお、親が経験している感情を伝達することを意味する「わたしメッセージ」も「反応型応答」である。

アイビイによる「マイクロ技法の階層表」¹⁰⁾(邦訳p.8)では、「基本的傾聴の連鎖」の中で、いいかえ・要約・感情の反映をあげている。これらは「確認型応答」である。また、「積極技法」に含まれる、指示・解釈・自己開示・助言・情報提供・説明・教示は「反応型応答」に相当する。

山口らによる「教師の応答カテゴリー」³⁰⁾では、応答を5つに分類しているが、非指示的応答(感情的・共感的理解と受容)が「確認型応答」に、指示的応答(助言・忠告・指導)・一般的応答(常識的な応答)・否定的応答(禁止的・命令的な応答)・援助的応答は「反応型応答」に相当する。

このように、「確認型応答」と「反応型応答」という呼称を導入すると、カウンセラーの態度や技法として従来から使われてきた分類が簡略化される。そして、ここで紹介したように、カウンセリングにおいては、反応型応答よりも確認型応答に相当する態度や応答が推奨されているのであるから、カウンセラーの態度や技法を説明する際に、従来の呼称に加えて、「確認型応答」「反応型応答」という呼称を用いることは、応答の種類と性質を簡潔に説明するために役立つものと考えられる。

4. まとめと課題

〈対話法〉では、「自分の考えや気持ちを言う(反応型応答)前に、相手が言いたいことの要点を、相手に言葉で確かめる(確認型応答)」ことを原則としている。なお、通常の会話のすべての場面で確認型応答を入れる必要はなく、重要な話をするときや、対話の途中で誤解が生じたり、意見や感情の対立が起こりそうになった場合、それに気付いた人が〈対話法〉の原則を意識的に使うことにより、対話の軌

道修正ができるとしている。

ところで、ロジャーズは、生涯を通じて、効果的な心理療法が成立する条件について研究をしてきたが、晩年は、それらの研究から得られた成果を、日常生活を含むさまざまな場面におけるコミュニケーションに応用するための研究と実践を行った。そして、ロジャーズの論文の中にも、〈対話法〉の原則に類似した記述がある。ロジャーズの場合は、「いつかあなたが、奥さんや友だち、あるいは友人の小グループと議論になったとき、少しの間実験のために議論をやめて、次のような規則をたててごらん下さい。それは“あなたがたは、まず、先に話した人の考えや気持ちを、正確にもう一度述べ、その話し手に納得してもらった‘あと’でしか、自分の意見を話してはいけません”というものである」³¹⁾(邦訳p.172)と書いている。ここで、「先に話した人の考えや気持ちを、正確にもう一度述べ」という部分は、「確認型応答」そのものである。ただし、ロジャーズの場合は、これを「一つの試み」として行うことを提案している。一方、〈対話法〉では、これを試みだけにとどめず、「対話の原則」として位置づけ、その重要性を提唱しているところに特徴がある。しかし、ロジャーズによる提案と〈対話法〉とに共通する課題は、「確認」が必要な状況や場面の概略を提示してはいるものの、詳細なタイミングまでは明示していない点である。〈対話法〉の原則をさらに実用的に使いやすくするためには、現実の対話の中で「確認型応答」と「反応型応答」を切り替えるタイミングや条件についての、さらなる研究が必要であろう。

引用文献

- 1) 浅野良雄：こころの通う〈対話法〉一解説とその実際一、浅野良雄・妹尾信孝、輝いて生きる、文芸社、83-172、2000。
- 2) 浅野良雄：対話における確認型応答の心理的効果、北出亮 他編、日本コミュニケーション学会創立35周年記念論文集—新たなコミュニケーション学の構築に向けて—、日本コミュニケーション学会、13-23、2006。
- 3) 清水敦彦、浅野良雄：高齢者介護施設職員への〈対話法〉の試み、足利短期大学研究紀要、22、1-7、2002。
- 4) 江川律子：学校教育における〈対話法〉の実践—養護教諭の職務の特質や保健室の機能を生

- かした健康相談活動として一、ヘルスサイエンス研究, 8, 63-6, 2004.
- 5) 浅野良雄：〈対話法〉を応用して共感能力を育てる授業, 臨床教科教育学会 編, 第3回臨床教科教育学セミナー発表論文集, 23-4, 2005.
 - 6) 浅野良雄：傾聴訓練が高校生の孤独感と学校生活満足度に及ぼす効果, ヘルスサイエンス研究, 11, 3-12, 2007.
 - 7) 松村明 編：大辞林, 三省堂, 1988.
 - 8) 西川一廉, 小牧一裕：コミュニケーションプロセス, 二瓶社, 2002.
 - 9) Trower P., Casey A., & Dryden W. : Cognitive-Behavioural Counselling in Action, London : Sage Publications, 1988. (内山喜久雄 監訳, 実践認知行動カウンセリング最新への援助技法ガイドブッカー, 川島書店, 1997)
 - 10) Ivey A.E. 福原真知子, 梶山喜代子, 園分久子, 榎木満生 訳編：マイクロカウンセリング, 川島書店, 1985.
 - 11) Rogers C.R. : The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change, Journal of Consulting Psychology, 21(2), 95-103, 1957. (伊東博 編訳, ロージャズ全集第4巻サイコセラピの過程, 岩崎学術出版社, 1966)
 - 12) 保坂享：理論家ロジャーズ, 久能徹 他, ロジャーズを読む, 岩崎学術出版社, 85-114, 1997.
 - 13) 榎木満生：産業カウンセリングの過程と技法, 杉溪一言 他編著, 産業カウンセリング入門, 日本文化科学社, 61-72, 1995.
 - 14) 西光義敏：暮らしの中のカウンセリング, 有斐閣, 1984.
 - 15) Rogers C.R. : Counseling and Psychotherapy, Boston : Houghton Mifflin, 1942. (佐治守夫 編, 友田不二男 訳, ロージャズ全集第2巻カウンセリング, 岩崎学術出版社, 1966)
 - 16) Rogers C.R. : The interpersonal relationship: the core of guidance, Harvard Educ.Rev., 32(4), 416-29, 1962. (島瀬稔 編訳, ロージャズ全集第6巻 人間関係論, 岩崎学術出版社, 1967)
 - 17) Rogers C.R. : A Way of Being, Boston: Houghton Mifflin, 1980. (島瀬直子 監訳, 人間尊重の心理学—わが人生と思想を語る—, 創元社, 1984)
 - 18) Rogers C.R. : Reflection of feelings and transference, Person-Centered Review, 1(4), 375-7, 1986, and 2(2), 182-8, 1987, Reprinted by permission of Sage Publications, Inc. (伊東博・村山正治 監訳, ロジャーズ選集・上, 誠信書房, 2001)
 - 19) 小川芳男：医療心理学, 北樹出版, 2005.
 - 20) Gordon T. : Parent Effectiveness Training, New York : Plume Book, 1975. (近藤千恵 訳, 親業—子どもの考える力をのばす親子関係のつくり方—, 大和書房, 1998)
 - 21) 三島徳雄, 久保田進也：積極的傾聴を学ぶ—発見的体験学習法の実践—, 中央労働災害防止協会, 2003.
 - 22) 海江七海子, 堀美紀子, 松村千鶴：看護学生のコミュニケーション能力育成に関する研究—CAI教材「言語的応答訓練」による学習効果—, 日本看護学教育学会誌, 14(1), 13-24, 2004.
 - 23) 鈴木克則：目標化支援カウンセリング, 宗像恒次 監修, SAT法を学ぶ, 金子書房, 21-56, 2007.
 - 24) 浅野良雄：こころの通う対話法, まぐまぐ, 2007.
 - 25) 浅野良雄：対話における応答の一致度とラポール維持との関係, ヘルスサイエンス研究, 7, 47-50, 2003.
 - 26) 渡辺三枝子：カウンセリング心理学, ナカニシヤ出版, 1996.
 - 27) Rogers C.R. : The characteristics of a helping relationship, Personnel and Guidance Journal, 37, 6-16, 1958. (伊東博・村山正治 監訳, ロジャーズ選集・上, 誠信書房, 2001)
 - 28) Snyder W.U. : An investigation of the nature of non-directive psychotherapy, Journal of General Psychology, 33, 193-223, 1945. (友田不二男 編訳, ロージャズ全集第16巻 カウンセリングの訓練, 岩崎学術出版社, 1968)
 - 29) Porter E.H. : An Introduction to Therapeutic Counseling, Boston : Houghton Mifflin, 1950.
 - 30) 山口正二, 芹澤智江子, 原野広太郎：相談場面における生徒の望む教師の応答様式—生徒の性格類型とカウンセリング様式の視点より—, カウンセリング研究, 21(2), 109-18, 1989.
 - 31) Rogers C.R. : On Becoming a Person, Boston : Houghton Mifflin, 1961. (島瀬稔 編訳, ロージャズ全集第6巻 人間関係論, 岩崎学術出版社, 1967)